

「コーヒーの値段でトーストの方がしつくりきます。朝の『モーニングサービス』(コーヒーの値段でトーストにゆで卵やサラダ付き)が朝食、昼は『日替わり定食』、また、仕事の打合せや、ちよつと休憩、仕事帰りの一杯など、同じ日に3〜4回と足を運ぶことがありました。ですから、マスターや店員さんともなじ



福岡の町を一望したよ

ちなみに、たねブレンドは一杯100円です。ぜひ、お立ち寄り下さい。

のよに色々な人が集い、おいしい食事を囲みながら互いの笑顔が溢れ、自然となじみの関係ができる場所であって欲しいと思います。

最近、「地域カフェ」や「認知症カフェ」、また「哲学カフェ」など、一つのカタゴリーを冠したカフェをよく耳にします。そうしたカフェは、コーヒーを飲んでくつろぐだけを目的にしたものではなく、テーマに沿って共通課題を分かち合ったり、各専門家からのアドバイスをリラックスした空間で聞くことができたり、参加者は新たな気持ちをもって日々の生活へと向かうことができる、そんな出会いと繋がりを目指した空間と言えます。

名古屋出身の私は、「カフェ」よりも「喫茶店」の方がしつくりきます。朝の『モーニングサービス』(コーヒーの値段でトーストにゆで卵やサラダ付き)が朝食、

みの関係となり、仕事の話から趣味、家族構成まで知られるような場所でした。

しかし、そうした喫茶店も時代と共に消え、「オーックス」や「オンカフェ」のように、店先で飲んでいてかっこよく見える店や、100円で挽き立てコーヒーが飲めるというように、「喫茶」はセレン感と手軽さに二分されているようです。

小さなたねの「たねカフェ」は、たねを利用している胃腸など経管栄養の方でも食べられるように工夫していますが、一つのカタゴリーに区分される空間としてではなく、当時の、「喫茶店」

あの「喫茶店」のよこ

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈)

たねスタッフのつぶやき

実家の裏庭に、プラムの木があります。昨年は数個しか実がなりませんでした。今年はずっと赤なプラムが鈴生りでした。

近所の人におすそ分けして、残りのはプラムで「コンポート」を作ってみました。短時間で手軽にできて、果肉の酸味を程よく感じられる、美味しいコンポートが出来ました。

「来年も、たくさん実をつけてよ！ 今度はジャムをつくるから……」と、今から期待しているわたしです。

北崎小百合(看護師)



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp

後記

バギーに乗った息子(重心)とお店のお菓子売り場にいると、4〜5歳の女の子が来て、「お兄ちゃんは病気？」と聞く。そうだと答えると、その子は自分も前に病気になってとても良かったこと、お母さんが病院に連れて行ってきて、薬を飲んだらすぐに治ったことを話し、「ママにどこの病院だったか聞いてよいか」と言う。私が今から病院に行くところだと伝えてお礼を言うと、女の子は「そう。治るといいね」とハイバイしてくれた。子どもの無邪気な思いやりにはホッコりする。そうだね、本当に治るといいな。(E)



今回の「たねプラス」は――

近所にある「徳栄寺」と「油山西公園」へ行きました。

徳栄寺では色とりどりの紫陽花が、キレイに咲いていました。

また、福岡市内を一望できる通称「シンデレラ公園」では、曇り空ではありましたが、見晴らしの良い景色に、「ワ～」と声が上がっていました。



小さなたねの 栄養相談のご案内

管理栄養士と一緒に考えてみませんか



口から食べる食事の形態調整や胃ろうからのミキサー食をおいしく、簡単につくるアイデアなど、それぞれの方に合った栄養量・摂取方法をアドバイスします。

また、訪問栄養指導もいたしますので、お気軽にご相談ください。

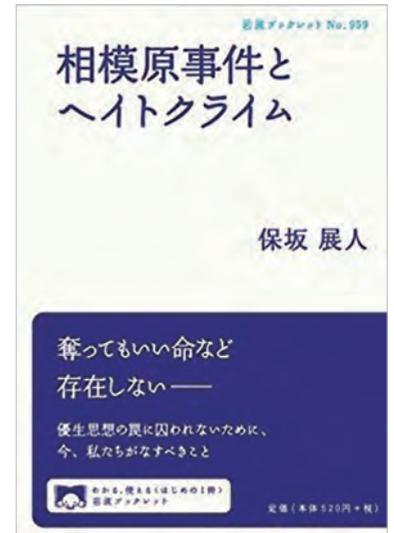
在宅管理栄養士 小淵智子

	来所	訪問
初 回	2,000円	3,000円
2回目以降	1,500円	2,000円

※にのさかクリニックを受診されている方は、医療保険適用になります。



オススメ 本



保坂展人 著
(岩波ブックレット/520円+税)



山崎章郎・二ノ坂保喜
佐藤 健・米沢 慧 共著
(春秋社/1,900円+税)

『相模原事件とヘイトクライム』

世田谷区区长でジャーナリストでもある著者は、「相模原事件」の深層を、ナチス・ドイツの「T4作戦」(およそ20万人の障害者が虐殺された)という歴史を紐解き、学びながら探究していく。
社会の波に流されないための「杭」となる一冊です。

『さいごまで「自分らしく」あるために』

ホスピスの現場から

在宅ホスピスシリーズ第3弾。
「在宅医療時代」に突入している中で、自らの人生を「自分らしく」生きるために、他人任せとならない「医療」のあり方を示してくれます。
もしもの備えに、ぜひどうぞ。

三つ目に、事件のあった敷地内の体育館で90人の方が事件後もずっと暮らしているという事です。同胞が惨殺された同じ敷地内で暮らすなどという事は、普通はないことではないでしょうか

(保坂展人著『相模原事件とヘイトクライム』から)
神奈川県は、来年度を目前に現施設を撤去し、規模を縮小して建て替える方針を打ち出しています。そこで暮らす一人一人の家族事情があり、当事者・家族の苦渋の決断も、きつとあったことでしょう。しかし、私自身のごとくに引き付けて考えれば考えるほど、やはり違和感を持たずにはいられません。

そして、その違和感は、周囲を否定し、社会を非難していても決して無くなることはないでしょう。少なくとも、障がいのある方たちが地域で暮らし続けられるように、「親子後」の先を考え続けることが必要です。それが「相模原事件後」を生きていることへの応答の歩みだと思えます。そして、社会に潜む「優生思想」へのカウンターカルチャー(対抗文化)を創り出すために情報を発信し、新た



たねカフェで「暮らし方」の懇談

な仕組みを生み出し、隣人との出会いと繋がりを喜び合える社会を目指したいのです。

私は今、行動し始めようとしていることがあります。今年で25歳となる娘は、すべてに介助が必要で、人工呼吸器管理や痰の吸引などの医療的ケアに加え、言語コミュニケーションが困難です。彼女の暮らしに「親」は不可欠な存在と言えますが、しかし、在宅医療や福祉の社会資源を活用し、ボランティアや地域の一人一人と繋が「親」が不可欠にならない、地域での暮らしを成立させていこうと考えています。先日、自治会の細長さんに提案してみました。すると隣で聞いてくれた奥さんが「私は何をしたらいいのでしょうか?」と尋ねてくれました。小さな一歩を踏み出します。

One for all. All for one.

「一人はみんなのために、みんなは一人(目的・ミッション)のため」です。